

Another

カリユブデイス・
レポート

シャドウフリード



黒ねこ作 | illust 関野武弘

KANTAI COLLECTION FANBOOK

KANTAI COLLECTION FANBOOK
SHADOW FLEET Another
- カリュブデイス・レポート -

黒ねこ作
表紙・挿絵／関野武弘

目次

プロローグ	【010】
第一章 対外調査課	【016】
第二章 疑念	【066】
第三章 真実を求めて	【112】
第四章 ヒトの罪業	【152】
エピローグ	【204】
あとがき	【210】

民間軍事会社『海神』の遊撃艦隊群。

それが、影の艦隊、である。

あらゆる理由と事情を抱えた艦娘が『海神』に雇われたとき、

彼女達は、傭兵艦娘、となり報酬のために命を賭ける。

『海神』対外調査課

【青葉(改)】

対外調査課の課長、『海神』随一の情報通

【初春(改二)】

対外調査課の主任、荒事専門の護衛担当

【若葉(改)】

対外調査課/別室の調査員、電子技術担当

【神風(改)】

対外調査課/別室の調査員、秘密工作担当

『海神』警備課

【那智(改二)】

警備課の課長、曲者揃いの警備課を束ねる長

【足柄(改二)】

警備課の次長、那智の相棒、近接格闘術のプロ

『海神』遊撃艦隊群/第一艦隊

【長門(改二)】

第一艦隊の旗艦、遊撃艦隊群の総旗艦、提督代行

『海神』技術開発課/医療班

【明石(改)】

強襲揚陸潜水艦 `海神、整備班の班長、技術開発課の課長

【氷川丸(改)】

強襲揚陸潜水艦 `海神、医療班の総主任、女王の綽名を持つ

日本帝國海軍/連合艦隊

【古鷹(改二)】

連合艦隊の艦娘、第八艦隊第六戦隊に所属

参謀本部第五部/特務艦隊

【大淀(改)】

帝國海軍の艦娘、『海神』を監視する特務監察艦

海軍省/海軍特別警察隊/公安部

【伊澤 行人 (イザワ ユキト)】

海軍特別警察隊公安部の部長、帝國海軍少将

日本帝國海軍/海軍技術研究所/大津研究所

【弓槻 孝紀 (ユヅキ タカノリ)】

旧大津研究所の所長、帝國海軍の元技官

【新村 秀明 (ニイムラ ヒデアキ)】

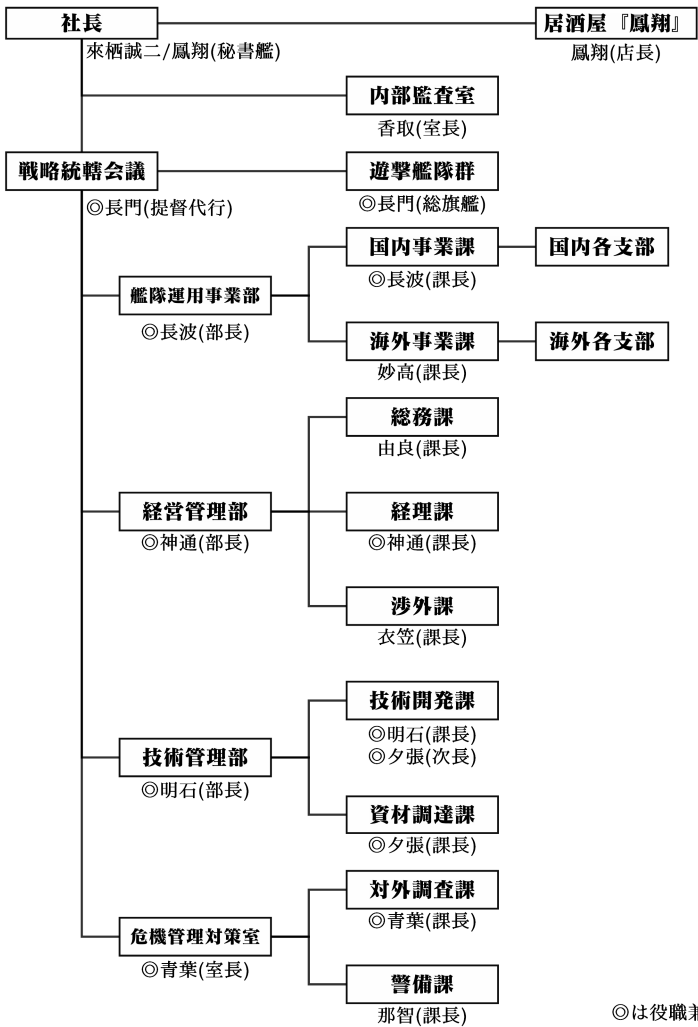
海軍技術研究所の職員、帝國海軍の技官

日本帝國海軍/海軍省

【長間 裕二郎 (ナガマ ユウジロウ)】

海軍次官で決戦派の次席、帝國海軍大将

民間軍事会社『海神』組織図 (2017年2月現在)



◎は役職兼務



人間には、二種類しかいない。
すなわち自らを罪人と信じる義人と、
自らを義人と信じる罪人とである。

プロローグ

——まるで気が狂いそうだった。

迷路のような薄暗い通路が分岐しながらどこまでも続いていた。出口を探して必死に走り回るモルモットはこんな気分かもしれない、と青葉は胸のうちでつぶやく。

コンクリートの壁とリノリウムの白い床。殺風景でどこか薄気味悪さを覚える通路をひたすらに走り抜ける。狙いはただ一つ、この研究所に在るであろう男だ。

電灯の切れた階段を駆け降りた。

青葉の手にはアサルトライフルが握られている。

通路に降り立ったところで、視界右上に表示された動体探知機が反応した。

九時方向に三体。壁に隠れた瞬間、対空機銃の掃射に襲われる。吐き出される銃弾が容赦なく壁を削った。空爆を想定した壁や天井は幸いにも分厚くできている。おかげで簡単には貫かれないが、このままだとジリ貧だった。壁の後ろから通路を覗き込む。

(……やむなしですね)

戦闘用ベストのポーチに左手を伸ばす。手榴弾を二個取り、安全ピンを口で抜いた。
闇市場に流れたアメリカ軍のアップル——M 67 手榴弾は約五秒で爆発する。

相手に反撃させる隙を与えないために、わざと二秒待ってから通路へと投げ入れる。カン、カンと手榴弾が床を跳ねる音がして、ちょうど通路の中間あたりで爆発した。

炸裂した破片が飛散し、機銃掃射の弾雨が止んだ。

青葉はM 4 A 1カービンを構えて追撃を加える。マズルフラッシュが激しく明滅し、排莖口は次々と空莖莖を飛ばした。跳弾の火花が散る。褐色の血飛沫が舞う。

金切り声にも似た悲鳴が上がった。

「痛い、痛い、イタイ、痛イイイ!!」

うつすらと漂う粉塵の向こうに影が立っている。青白く変色した皮膚と脱色した白い長髪——人型を辛うじて保っているだけの「バケモノ」がいた。

「……如月さん」

睦月型二番艦・如月。彼女はそう呼ばれていた艦娘の成れ果てだ。

他の二体は手榴弾の爆発を直に受けていた。腐蝕化した褐色の血と臓物をぶちまけ、片手や片足を失いながらも、まだ藻掻くように立ち上がろうと動いている。

「如月」が憎悪を浮かべて連装砲を構えた。

「アナタモ、ココデ楽ニシテアゲルッ！」

「——っ！」

連装砲が火を噴くと同時に、青葉は飛び込むように伏せる。

頭上を擦った砲弾が通路の壁を撃砕した。強烈な反動を食らって後退った「如月」の隙を突き、青葉が伏射でフルオート射撃を叩き込む。ドラムコールじみた銃声が鳴り、無防備な「如月」の全身を容赦なく弾丸の雨でズタズタに切り裂く。

銃創から鮮血を飛沫かせ、奇つ怪なダンスを披露した「如月」が崩れ落ちた。

空の弾倉を捨て、プレートキャリアの予備マガジンを差し込む。

青葉は、銃を構えたまま立ち上がると、ゆっくりと「如月」に近づく。

「……ウウ、ア……」

低い呻き声を上げ、ぼたぼたと汚れた血を垂らしながら起き上がろうとする。

艦娘は頑丈にできている。艦装を装備しているときは特にそうだ。人間よりも優れた耐久性を持ち、しんかいせい深海棲艦という怪物と戦うべく作られた人造人間——それが艦娘だ。

だが、艦娘も不死身ではない。少しばかり死ににくいというだけだ。

青葉は「如月」の後ろ頭に銃口をつける。

「すみません、如月さん。せめて安らかに……」

トリガーに掛けた指を引き絞る。腐蝕で青白くなった皮膚は呆気なく銃弾を通した。弾丸が脳幹を貫く。『如月』は四肢を痙攣させ、そして静かに事切れた。

残りの二体も始末する。すると今度こそ本当に動かなくなった。

脳幹は、運動や知覚を制御し、呼吸や心臓の動きにもかかわっている。人間も艦娘も身体の作りは同じだ。つまり、脳幹を破壊すれば起き上がることはあり得ない。

青葉は最奥のドアに向かった。

ギリッと奥歯を噛みしめる。胸のうちに激しい怒りがあった。彼女達を救えない己の無力さが悔しい。親友が沈んだときもそうだ。気がついたときには全てが遅すぎる。

鋼鉄のドアを蹴り開けた。

白色灯の眩しきで一瞬目を眇める。体育館のような広い空間だ。水槽じみた円筒形の培養容器が等間隔で並んでおり、どれも赤い透明な液体で満たされていた。

向かい壁にエレベーターが見える。ちょうど白衣の男が乗り込むところだった。

「止まれッ！」

発砲するも間に合わない。閉まるドアの向こうで男が振り返る。頭の右半分を包帯で覆った男は笑っていた。まるで宗教画のモデルになったように微笑んでいる。

——狂人め。あの男は数多の人間と艦娘の命と尊厳を奪った狂人だ。

閉じたドアに銃弾が弾かれ、エレベーターは上階へと動き出す。

「逃がしませんよ！ あなただけは！」

後を追うために走り出したときだ。突然、エレベーターの前にある左右の培養槽で、ガラスの容器が持ち上がった。赤い液体を押し流して、二体の怪物を放出する。

髪や肌の色はまだ残っているものの、どちらも身体の表面が黒い装甲のような肉腫で覆われ始めている。最大の特徴は、後ろ腰についた艤装と思しき双頭の異形だ。

青葉は銃を構えたまま息を呑む。

「古鷹さん、加古……」

かつての親友達と瓜二つの古鷹型重巡の姉妹艦。姉艦あねの古鷹はまだ少なからず意識が残っているようだった。腐蝕の苦しみへ抗うように、微かに口を動かしている。

「……わたしを、殺しテ……」

金色の左目から涙が伝い落ちた。

深海棲艦ではなく、艦娘として死なせて欲しい。古鷹は暗にそう言っていた。青葉は小さく首を横に振る。

「諦めるのは早いですよ。古鷹さん」

一方、妹艦いもうとの加古はだいたい腐蝕が進んでいる。真っ赤な瞳に殺意を湛えた。

「ウオアアアアアアッ！ 沈メツ！ ココデツ！」

後ろ腰の異形——三連装砲を備えた大きな顎あぎとが咆哮する。ドンッ！ 計六門の主砲が火を噴く。青葉は咄嗟に真横へ飛ぶ。砲弾が入り口周辺の床をまとめて打ち砕いた。

培養槽の間を走った。追いかけるように、砲弾が速射で撃ち込まれる。

「くっ！ こういう荒事は得意じゃないんですけどねえッ！」

こちらは圧倒的に火力で負けているが、接近戦に持ち込めば勝機はある。なにより、腐蝕化している二人を救うには、彼女達を組み伏せて接触しなければならぬ。

間に合うかわからない。成功するかもわからない。それでもやらなければならない。かつて仲間を、親友を救えなかった。だが今は違う。同じ過ちは繰り返さない。

——自らの背負った罪を精算する。これは贖罪のための戦いだ。

青葉は真剣な表情ではつきりと告げた。

「古鷹さん、加古！ 今度こそ救います！ 必ず！」

第一章 対外調査課

1

街灯の明かりが眩しいと感じる裏路地だった。

ビル風が吹き抜け、トレンチコートの間隙から真冬の冷たい風が入り込む。表通りを通った車のヘッドライトが宵闇を裂き、わずかな残光を向かい壁に映して消える。

青葉は、缶コーヒーを手にぼんやりとそれを眺めていた。

——ここ最近よく考える。昔、自分がどんな理由で戦っていたのかを。

どこかの艦娘が理想という言葉で語っていた。

人類を脅かす“深海棲艦”を倒し、平和な海を一日でも早く取り戻すため。

それも間違いではない。第二次世界大戦の只中、突如現われて圧倒的な物量で侵攻を始めた怪物は、約八十年も人類から海洋を奪い取って様々な影響を与えてきた。

平和のためか、国家のためか、あるいはその両方か。模範解答はいくらでもある。

(……古鷹さん、加古。あの日、私は二人を救えませんでした)

二人は眼前で散っていった。かれこれ四年前だが、今でもはつきりと覚えている。たった二人の親友すらも救えなかった。自分はそれほどまでに無力だった。

(だから、私なりに今も戦っている……)

これは贖罪だ。生き残ってしまった者が背負う十字架に対しての責任なのだ。

温くなった缶に口をつける。人工甘味料の不快な甘さが体に流れ込む。

(まあ無力なのは相変わらずですけどね。それでも今は——)

自分なりのやり方で戦っている。昔と戦場は違えど、ここも最前線だ。

ザッ、と左耳のイヤホンに雑音ノイズが混じる。初春が報告した。

『青葉よ、出番じゃ。対象到着まで二分を切った』

やや古風な喋り方をする彼女は、初春型一番艦の相棒だ。いわゆる駆逐艦と呼ばれる艦種の「艦娘」であり、悠揚ゆうよう迫らぬ見目に反して荒事が専門の護衛役であった。

「了解です。回収の手配はお願いしますよ」

『うむ。遅れるでないぞ』

ぐいっと中身を飲み干し、コートのポケットに缶を突っ込む。数メートル先の小さな階段を上がり、建物の勝手口である鉄扉を三回ノックした。

黒服のボーイが扉を開けた。眠たげな顔をしたやる気のなさそうな男だ。

「セキュリティカードは？」

男が胸ポケットから白いカードを出した。コートのポケットを漁り、輪ゴムで束ねた札束を受け渡す。これは単純な取引だ。名前も知らない男は、金を受け取り出て行く。

青葉はカードを手に従業員通路へ入った。

建物の斜向かいでは、初春が正面玄関を監視している。日本で歴史と伝統ある屈指の高級ホテル——帝国ホテルに出入りする客から対象を見分けるためだ。

『ロビーに入った。さすがは連合艦隊の一員じゃ。堂々たる姿よのう』

歩きながら脱いだコートを腕に掛け、ダークスーツ姿で通路を抜ける。何食わぬ顔で厨房の横を過ぎ、買収したセキュリティカードで最後の電子ロックを開錠した。

ドアを開けた途端、大量の話し声がなだれ込んでくる。

きらびやかな装飾の大宴会場は人で溢れていた。そのほとんどは帝国海軍の軍人だ。黒い軍服を着た彼らの傍に、パーティードレスで着飾った艦娘達の姿もあった。

よく見ると政財界の顔役で知られる大物もちらほらいる。

(さすがは“建御名方”の竣工記念パーティー。要人が目白押しですねえ……)

——建御名方。帝国海軍で二隻目となる建御雷神級の大艦娘運用艦だ。

海上の前線^F基地^Bとなる艦娘運用艦は、外地の作戦活動を円滑に進める上で欠かせない代物だ。例えるなら、戦闘機の代わりに艦娘を收容した空母と言ったところか。

もっとも、わざわざ会場へ潜入した目的は新造艦の情報収集ではない。

人混みに紛れて歩き、窓辺で佇む重巡艦娘に声をかけた。

「ども、古鷹さん」

「青葉？」

振り向いた古鷹が驚いた表情で固まる。

青葉は胸中で苦笑した。そういう反応には慣れていている。

「私はあなたの知ってる『青葉』じゃありませんよ。古鷹さん」

艦娘は量産できる兵器だ。性格は違えども、自分とそっくりな姿形をした赤の他人が帝國海軍に数多くいる。とはいえ、左頬に古傷を残した『青葉』は少ないだろう。

両肩を大きく開けた白いドレスを着た古鷹が、ちらりと周囲を見回した。

「まさか会場に乗り込んで来るなんて……」

「木を隠すなら森と言いますからね。内緒話には打ってつけですよ」

青葉は右手を差し出す。

「『海神』対外調査課の青葉です」

古鷹がやや躊躇いがちにその手を握り返した。

通常、艦娘は各国海軍が保有する次世代人型機動兵器として知られ、日本の艦娘なら日本帝國海軍Nの所屬となる。だが、帝國海軍と一線画するイレギュラーな者達もいる。

民間軍事会社『海神』わたみに籍を置く『傭兵艦娘』ようへいかんむすだ。

あらゆる理由や事情を抱えた艦娘が『海神』に雇われた時、彼女達はリスクと報酬を秤にかけて戦う傭兵艦娘となる。故に、人類の敵を金になるか否かで判断する。

——傭兵艦娘に大義や正義はない。一度の仕事で得られる報酬が全てだ。

優れた戦略や戦術も情報と兵站なしには成立しない。対外調査課は情報部門として、『海神』で引き請ける案件の事前調査や審査を行っており、青葉が課長であった。

おや？ 青葉は離れた手のひらを見た。SIMカードがある。

古鷹が微かに頷く。なるほど。これが提供する『情報』というわけだ。

「なぜ、私たちに連絡を？」

帝國海軍の艦娘と傭兵艦娘は、お世辞にも仲が良いとは言いがたい。

理由は簡単だ。傭兵艦娘になる者は、少なからず海軍に不満や何らかの確執を持って『海神』の一員となる。帝國海軍ではそんな傭兵艦娘達を「落伍者」と蔑んだ。

古鷹が外に視線を向けた。

「『海神』が艦娘の失踪を調べてるって聞きました」

ブラウンと金色のオッドアイ。窓ガラスに映るその瞳に不安が宿っている。

「二週間前、加古が基地からいなくなっただんです。提督は脱走を疑ってるんですけど、加古に限ってそんなこと絶対にあり得ないと思うから……」

艦娘の脱走はゼロではない。劣悪な環境や上官からの暴力など、脱走理由は様々だが環境に起因する例が大半を占める。事実、『海神』で保護した艦娘が口にする理由は、どれも似たり寄ったりだ。とはいえ、連合艦隊の一員が脱走というのは珍しい。

連合艦隊といえば、帝國海軍を代表する一大艦隊である。

横須賀、佐世保、呉、舞鶴の四大鎮守府に加えて、各泊地の粒揃い召集した最精鋭の艦娘達である。待遇はもちろん、あらゆる面で格別の扱いをされていた。

青葉はさり気なく腕時計を確かめた。まだ余裕はある。

「事情はわかりました。私たちの連絡先はご自分で？」

「ある人から『海神』を頼るように言われたんです」

「そしてこれを預かった？」

何の変哲もないSIMカード。古鷹が領いた。

「『海神』なら加古を見つけられる、とも……」

青葉は少し考える。

二週間前だった。最近増加している「艦娘の失踪事件」を調べ始めた矢先に、彼女が電話を直接掛けてきたのだ。艦娘の失踪に繋がる情報を渡したい、と。手がかりに行き詰まっていたこちらにとつては、まさに渡りに船といったタイミングであった。

「その『ある人』に会わせてもらえませんか？」

古鷹が小さく首を横に振った。

「匿名にすること。これが情報提供の条件です」

——情報提供者が匿名。これもよくある話だ。

説得する時間もなさそうだ。窓ガラスに映った会場の入り口に二人の男が現われた。がたいの大きな黒いスーツの警備員。こちらを目指して人波をかき分けて来る。

青葉はSIMカードを上着の右ポケットにしまう。

「わかりました。それじゃ匿名ということで」

「ありがとうございます。もし、加古を見つけたら……」

「ええ。真っ先に連絡しますよ」

青葉はそう答えて古鷹から離れる。

招待客の合間に逃げ込むと、男達も後を追いかけてきた。

たまたま通りかかったボーイの足を素早く引っかけかけて転ばせる。割れるガラスの音と周囲のどよめき。男達の視線がそちらに向いた一瞬で、青葉は元来た通路へ入った。

足早に歩きながらコートを羽織り、厨房を通り過ぎて勝手口から外に出る。排水溝にセキリティカードを捨てて、何食わぬ顔で表通りに出た。

キュツとタイヤを鳴らし、黒塗りの四駆車が目の前で停車する。

メルセデス・ベンツのG500——俗にGクラスと呼ばれるSUVだ。青葉が後ろに乗り込むと同時に発進した。バックミラーで追って来た警備員達が遠ざかっていく。

初春が助手席から振り返った。

「遅いぞ。どこで油を売っておったのじゃ」

「まあまあ。ちよつと予想外のことがあったんですよ」

淡い紫の長髪を一束ねにした初春は、親骨に金色の蒔絵が入った鉄扇を持っている。

彼女の服装は、いわゆる『改二仕様』というワンピース風の白いセーラー服だった。

運転席には黒いスーツ姿の重巡艦娘がいる。

「作戦に予想外イレギュラーは付きものだからな。情報は持ち帰ったんだろう？」

「もちろんですよ。那智さん、このまま本社に向かってください」

——妙高型二番艦・那智。黒の革手袋を着けた手でハンドルを握る彼女は『海神』の

警備課を束ねる課長だ。左頭でサイドテールに結った黒い長髪。キリッとした目つきと厳格そうな容貌は、どことなく武人然とした佇まいを見る者に印象づける。

警備課の主な仕事は、護衛や施設警備だ。依頼主の警護に加えて、『海神』の要人や施設を護る役目を負っていた。故に、情報部門の対外調査課とも密接に連携しており、どちらも「危機管理対策室」の直下に置かれていた。青葉は室長を兼任している。

早い話、対外調査課と警備課は『海神』を支える裏方であった。初春がパチンと鉄扇を閉じた。

「まあよい。それより成果はどうじゃ？」

「ありましたよ。ただ……」

「何じゃ？」

SIMカードを取り出し、青葉は怪訝な表情で続けた。

「今回の案件、どうも色々と裏がありそうですね」

2

『海神』の本社は、帝都・東京の片隅に建っている。

西暦二〇一七年現在、東京は「帝都」と古めかしい呼び方をされつつも、高層ビルの轟めき合う大都市に発展し、人々は様々なハイテク技術に囲まれて生活していた。

——日本帝國。現代世界で唯一「帝國」を名乗る最後の帝國だ。

日本が未だ「帝國」である理由を知るには、歴史を少しばかり遡る必要がある。

一九四二年六月五日。第二次世界大戦の結末は、深海棲艦の出現で大きく変わった。

大日本帝國は対米戦争を早期講和で終結させ、中国大陸と仏印から撤兵。三国同盟も破棄したことで、太平洋戦争と日中戦争の両方をいっぺんに終結へと向かわせた。

また後世に悪名を残したであろう戦争指導者を、陸軍強硬派が画策したクーデターを逆手に取って追放し、大日本帝國の国号を「日本帝國」に改称した。

約八十年が経過した現在、日本は急速な欧米化の流れを汲み、半民主的な立憲君主制国家として存続している。それらは全て「対深海棲艦戦争」へ集中するための方策だ。

当然、これは日本に限らず万国共通の話であり、人類全体の問題でもあった。

那智が車を止めに行った一方で、青葉は初春と社屋に入った。

強化ガラスで正面を覆われた六階建てのビル。周囲のマンションや中小企業の社屋へ溶け込むように建っているそれが、民間軍事会社の本社だと判る者はまずいない。

二人でエレベーターに乗る。まず六階の社長室に向かう。軍でも会社でも上に対する

報告は必要だ。最上階に着けば、観音開きの立派な扉が現われる。

扉をノックすると、すぐさま返事がした。

「入れ」

青葉と初春は従った。

社長室は大きな会議室並の広さがあり、ガラス張りの右壁からは通りを一望できた。部屋の中央に応接セットが置かれ、その奥で鎮座する黒檀の執務机に艦娘がいる。

何かの書類を読んでいた艦娘——長門型戦艦一番艦・長門が顔を上げた。

「来たか。まずは座ってくれ」

そう言つて、応接セットのソファアを示した。美しい漆黒の長髪と白色を基調とした改二制服に身を包む彼女は、海軍軍服の上着を肩に羽織っている。

初春と腰を下ろし、青葉は端的に報告した。

「先方との接触は成功ですよ。長門さん」

「ご苦労。手がかりは掴めたか？」

「まだ確証はありませんけどね。ところで提……いえ、社長はどうしたんです？」

「商談だ。ちょうど急ぎの仕事が入つてな」

長門は社内ですごい肩書きを持っている。

社長に『海神』の主戦力たる「遊撃艦隊群」の全権を任された「提督代行」であり、遊撃艦隊群を統率する「総旗艦」だ。遊撃艦隊群——通称「影の艦隊」は、『海神』の保有する最大戦力として、あらゆる海域で作戦行動を取る特殊な部署である。

ちなみに『海神』の社長は、元帝國海軍の少将だった。

横須賀鎮守府の提督だった頃から、長門は社長の秘書艦かつ艦隊旗艦を務めてきた。

当時、青葉も艦隊の一員として横須賀鎮守府にいた。だからこそよくわかる。社長と長門の間には強固な信頼関係と深い絆がある。彼女の羽織る軍服がその証だった。

長門が机上のシガレットケースを手にとった。

「わかったことは？」

「謎のSIMカードが一枚、今のところそれだけです。あとは連合艦隊からも失踪者が出ていたってことぐらいですね」

長門は葉巻煙草を咥え、オイルライターで火を点ける。

ブラックストーン。チェリーフレーバーの甘い香りが特徴的なシガリロだ。

「参謀本部も厄介な依頼をしてきたものだ……」

かれこれ二週間前のことだ。

社長に急遽呼び出され、青葉は長門と帝國海軍参謀本部に赴いた。

帝國海軍は『海神』の大口顧客だ。物資輸送やその護衛、戦闘任務の委託業務など、依頼の大半は参謀本部からであり、呼び出されて依頼を請けることも間々あった。

ところが、その日の依頼内容は少しばかり異例だった。

——『君達にある事件の捜査をしてもらいたい』

参謀総長の永乃修ながのおさむは、開口一番にそう告げてきた。

ここ最近、帝國海軍では二つの事件が問題視されている。

青葉は両肩を小さく上げた。

「艦娘の失踪、輸送部隊の相次ぐ襲撃……今のところ、この二つに関連性があるのかはわかりませんけどね。ただ、『海神』の自作自演を疑う声が多いのは事実です」

「社長と永乃総長の懸念もそれだ。角刀すみわきと決戦派に『海神』解体の口実を与える事態は避けねばならん。小火ぼやは大火事となる前に消しておくに越したことはない」

青葉もその意見に同感だった。

「ええ。この機会を決戦派が傍観するとは思えませんからねえ」

二人の会話を理解するには、現代の帝國海軍の組織について知る必要があるだろう。

帝國海軍の軍政機関は『海軍省』だが、作戦計画や戦略は『海軍参謀本部』を中心に立てられており、『海神』に依頼を出すのも基本は彼らであった。

しかし、艦隊戦力の指揮は「海軍総体司令部」が執る。連合艦隊司令部も兼ねているため、総体司令部の司令長官は必然的に「連合艦隊司令長官」を兼務する。

これらのトップを「海軍三長官」と呼び、帝國海軍の意志決定を左右していた。そして、現在の三長官は次の通りとなっている。

海軍大臣・米納行昌。

よないゆきまさ

海軍参謀本部参謀総長・永乃修。

ながのおさむ

海軍総体司令部司令長官・角刀庄造。

すみわきしやうぞう

三人とも海軍大将であり、米納と角刀は五十代、永乃は四十代半ばであった。初春が退屈そうな表情で口を挟む。

「つまり、わらわたちは決戦派と守戦派の派閥争いに巻き込まれたわけじゃない」帝國海軍の内部は大きく二派に割れている。

角刀を筆頭とする「決戦派」と、米納と永乃を中心とする「守戦派」だ。

艦隊戦力の増強と大胆な攻勢こそ、深海棲艦を撃滅し、日本の繁栄に繋がると訴える決戦派は総体司令部を牙城としている。一方、守戦派は参謀本部を中核に、戦力温存と拡充を図り、奪還地域の防衛を強化してこそ国家の安定に繋がると訴えていた。

では、海軍省はどうなのか？ 答えは、決戦派と守戦派が半々である。

軍政機関はすなわち軍隊の管理を行なう組織だ。人事、予算、戦略や戦術の方針から政治的な調整も行っている。故に、海軍省を占めた派閥が帝國海軍の舵取りを担う。

そうして二派閥の激しい人事抗争が起き、現在の勢力図へと収まった。

長門は辟易とした表情をする。

「『海神』を肯定する守戦派にとつて、この件は無視できないからな。決戦派に足下をすくわれかねないとなれば尚更だ」

「これまで壊滅した輸送部隊は七つ。生存者の証言では、帝國海軍らしき艦娘に襲撃を受けたとか……私たちが真つ先に疑われるのも当然ですよ」

「このまま放っておけば、わらわたちの信用はがた落ちじゃな……」

紫煙を漂わせ、長門が机上で両手を組んだ。

「ああ。だから我々の手で解決しなければならんだ」

「わかってますよ。まだ情報が足りませんが、一つ気になることがあります」

「なんだ？」

青葉は例のSIMカードを上着のポケットから出した。

「情報提供者ですよ。私たちが捜査をしていることを先方は知っていました」

あの「古鷹」は協力者に過ぎない。

彼女にSIMカードを渡した人物こそ、こちらが欲しい手がかりを握っている。
長門が驚きを露わにした。

「馬鹿な。この件は内々の依頼だぞ」

「だから気になるんですよ。ただ、連合艦隊と接触できる方は多くありませんからね。
そして、私たち外部に情報を託したということは……」

「……内部告発か」

「あくまで推測ですけどね」

帝國海軍の内部で何らかの不正が行われている。心ある者が仮にそれを告発しようと思つたところで、上層部や組織ぐるみの犯行であれば揉み消される可能性は高い。

長門の目つきが鋭いものとなる。青葉を見据えた。

「情報提供者を特定できるか？」

青葉は少し考える。

「機密情報を読覧できる役職で、内部の情報にも精通している……それも艦娘の信用を得られる立場、あるいは人間性を持った人物。そんなところですね」

「……今ひとつ曖昧だな」

「プロファイリングしようにも情報が足りませんからね」

長門はそうなのかと素直に納得する。彼女は戦闘と艦隊指揮のプロだが、情報収集や捜査、分析といった分野には不慣れだった。故に、危機管理対策室は作られた。

誰にでもそれぞれ役割がある。長門の役割は、『海神』という旗の下に傭兵艦娘達をまとめ上げることだ。そんな彼女を裏方として支える。これが青葉の役割だった。

青葉がソフアーから腰を上げた。初春も一緒に立ち上がる。

「まずは入手した情報を洗ってみます」

「うむ、やり方はお前に任せる。人手が必要なら、遊撃艦隊群からも回そう」

「了解です。進展があれば報告しますよ」

3

夕飯を買いに行く初春と別れ、青葉は三階でエレベーターを降りた。

パーティションで二分した大部屋は、対外調査課と警備課のオフィスとなっている。

給湯室やトイレのある通路から見て、右は対外調査課、左が警備課のドアだった。

電子ロックに暗証番号を打ち、対外調査課のオフィスに入る。

「戻りましたよ」と

閑散としたオフィスに、大型のシステムデスクが五台ある。

青葉のデスクは上座の最奥であり、書類や資料に加えて、専用のコーヒーマーカーを置いていた。残りは通路を挟んで左右に二台ずつ。パソコン用のモニターと固定電話、あとは個人の私物だ。恐らくその中でも一際目立つのが彼女のデスクだろう。

青葉の席の左斜め前、ヘッドホンを付けてタイピングする艦娘がいた。

ディスプレイ四台を前にして、ピアノストのごとくなめらかな手つきでキーボードを操る。デスクの側まで行くと、ようやく存在に気がついたのか、ヘッドホンを外した。

「いつの間に戻ったんだ……」

「今ですよ。若葉さん」

初春の妹艦いもうとに当たる若葉は、ブレザー風の黒い制服を着崩し、緩めた赤のネクタイを着けている。姉艦あねの初春と違い、彼女の髪は跳ね癖の多い茶髪であった。

「手がかりならまだないぞ」

青葉はデスクにSIMカードを置いた。

「解析をお願いします。中身が知りたいんですよ」

「データSIMか。どこから？」

「匿名の情報源ですよ」

「わかった。任せておけ」

対外調査課で技術担当を務める若葉は、ハッキングや暗号解読の専門家だ。デスクの引き出しを開け、SIMカードを差し変換用デバイスをパソコンと接続する。

「ところで何をしていたんですか？」

「失踪した艦娘の通信記録を調べてた。さっきので四十人目だ」

「その様子じゃ収穫はないみたいですね」

キーボードを操作しながら、若葉は小さく溜息をつく。

「任務報告と雑談ばかりだ。ただ、全員が脱走する心理状態だったとは思えない」

履歴書じみた資料を右画面に映した。艦娘の戦歴証明だ。艦名や所属、製造年月日や戦闘で挙げた戦果など、艦娘の個人情報とすべき内容が記載されている。

「例えば、ブルネイ泊地から失踪した〃如月〃だ。提督と週末にデートだと喋ってた。しかも失踪する前日、海軍省にケツコン指輪の申請を出してる」

「確かに妙ですね。そんな艦娘が脱走するとは思えませんし……」

海軍省には〃ケツコンカッコカリ〃という特別制度がある。

通称「ケツコン」と呼ばれる特別褒賞であり、提督と婚姻関係を結んだ艦娘は人権と戸籍を与えられる。海軍省が交付する指輪がその証だ。ただし、誰でもケツコンできる

わけではない。あくまでも相応の戦果を収めた優秀な艦娘に限られる。

若葉がキーボード上で手を止めた。

「こいつは送受信情報を多重に暗号化するアプリだ。しかも軍用だぞ」

「というど？」

「ある特定の追跡情報を送るGPSだ」

「なるほど。場所は？」

若葉は中央のディスプレイに衛星画像を表示した。どこかの島だろうか？ 藍鉄色の海原に荒涼とした細長い大地がある。さらに拡大すると、建物のような点が見えた。

「サハリン島だ」

「新ソ連ですか……」

——ソビエト共和国連邦。通称「新ソ連」と呼ばれる北の大国だ。

二十五年前、旧ソ連の国民投票で『社会主義体制』を捨てながら、ソビエトの国名を残した新連邦国家は、現代でもクレムリンにソビエトの赤い旗を掲げている。

サハリン島は新ソ連の極東連邦管区に属しており、宗谷海峡とオホーツク海を挟んで北海道と接している島だった。新ソ連が深海棲艦の存在にかこつけて、安全保障の下に実効支配を始めるまでは、日本の領土として人々から「樺太島からふと」と呼ばれていた。

青葉は腕組みしながら尋ねた。

「信号の発信源は？」

「わからない。今はな」

「今は？」

「……こいつは誰かの発信した位置情報を読み取るSIMカードだ。だからシグナルが発信されないと、追跡しようにもできないんだ」

「予備の携帯が必要ですね」

若葉がデスクの引き出しを開け、雑多に放り込まれた携帯端末を示した。

「好きに持って行け。シグナルが発信されたら通知が鳴るはずだ」

「いつも助かりますよ」

スマートフォン型の端末を選び、SIMカードを差し込んだ。

「あー、そうそう。週末なんですから残業もほどほどにしてくださいよ」

「安心しろ。二十四時間、寝なくても大丈夫」

「そういう問題じゃないんですけどね……」

青葉は苦笑混じりに両肩を竦める。若葉は極度のワーカーホリックだ。放っておくと家にも帰らず、何時間でもオフィスに入り浸って仕事にのめり込んでしまう。

初春がコンビニの袋を手に入ってきた。

「待たせたのう、若葉。わらわが夕餉ゆうげを買って来てやったぞ」

「ありがたい。ちょうど空腹だったんだ」

大方、昼食も摂らずにいたのだろう。初春はそんな妹艦を見かねて、こうして食事の差し入れをしたり、一緒に住んでいる自宅まで連れ帰ったりと世話を焼いていた。

艦娘に血の繋がりは無い。だが、長く一緒に過ごしているとそうした絆が生まれる。

まして二人は軍で苦難を共にした戦友だ。その絆は血の繋がりによりもずっと深い。

青葉にも妹艦がいる。そして帰るべき家があった。

「それじゃお先に。戸締まりは任せますよ」

スマートフォンをコートのポケットに入れ、青葉はオフィスを後にした。

4

青葉の住んでいるマンションは、本社から車で十分の場所にある。十階建ての新築で玄関はオートロックだ。建物の一階は駐車場になっている。契約した部屋は三〇二号室。間取りは2LDKと、妹艦と暮らすだけなら十分過ぎる広さだ。道路を挟んだ向かいに

ある大きな公園は、子連れの母親や老人が休日になると散歩がてらに歩いている。

青葉は遅めの夕食を摂ってから、自室でノートパソコンを立ち上げた。

ベッドにクローゼット、窓際へ置いたデスクの上にはアルバムや昔からの趣味であるカメラがある。やや古びた一眼レフ。帝國海軍にいた頃から愛用する年代物だ。

パスワードを打ち、『海神』の社内ネットワークに接続する。

ほとんど日課になっている残務処理だ。部下達に残業を控えろと言いながら、自分には持ち帰って仕事をしている。我ながら矛盾していると胸中で苦笑した。

まずは各支部から送られてきた日報や報告書に目を通す。

『海神』は各地に多数の支部を持っていた。

帝國海軍が奪還した地域には必ず一店舗は支部がある。支部の役割は、遊撃艦隊群が各地へ赴いた際のサポートや情報収集だ。傭兵艦娘は各支部の艦隊にも在籍しており、民間船舶の定期便を護衛したり、地域ごとの案件を処理したりしている。

次に帝國海軍から渡されたデータを開く。輸送部隊の概要、消えた艦娘の戦歴証明や訓練所時代の評価など、ほとんど黒塗りであり役立ちそうにない資料ばかりだ。

これまでに失踪したと思われる艦娘は四十名を超えている。帝國海軍の艦娘保有率のパーセントにも満たないが、無視できるほど小さな数字でもない。消えた艦娘同士の

接点はゼロ。艦種や艦型にも関連性がなく、脱走を図る理由も恐らく持っていない。そうになると辿り着く結論は一つだけだ。

(……拉致された、としか考えられませんね)

日本の艦娘技術を狙う国による拉致事件。現実としてはあり得る話だ。

ただし今回に限って言えばあり得ないだろう。軍隊はメンツを第一に考える。本当に第三国による拉致なら外部に任せない。あらゆる手段を用いて軍が解決するだろう。

輸送部隊の襲撃事件も似たようなものだ。

積み荷は全てバラバラで、行き先も南方の外地というだけで手がかりはない。護衛の艦娘が全滅しており、当初は深海棲艦による被害だと思われていたほどだ。

(困りましたね。本当に……)

椅子の背もたれに体重を預けて溜息をつく。デスク上の写真立てを見た。少しばかり古ぼけた集合写真。四人の重巡艦娘が、勲章を手に思い思いのポーズを取っている。

「古鷹さん、加古……こんな時、お二人ならどうするんでしょうね」

この世にいない親友達。二人は仲間を生かすために自らの命を犠牲にした。

——四年前の沖ノ鳥島攻防戦。深海棲艦の大規模侵攻を阻止する戦いの最中だった。総司令部の予想を遙かに超える飽和攻撃により防衛線は崩壊。共同戦線を張っていた

アメリカ軍は密かに後方から撤退し、日本帝國軍に無通告で核攻撃を行った。

この煽りを受けた帝國海軍は甚大な被害を出し、最前線で奮闘していた艦娘や将兵の大多数が核の炎で消し飛び、生き残った部隊も混乱したまま孤立を余儀なくされた。

当時、青葉も横須賀鎮守府の第六戦隊として防衛戦に参加した。

——あの日の海は凄絶だった。この世に顕現した地獄そのものと言ってもいい。

いくら倒しても途切れることがない敵群の戦列。吹きつける潮風が焼け焦げた人肉と硝煙の入り混じった異臭を運び、流された血と重油で海面は赤黒く染まっていた。

核爆発の引き起こす電磁パルス^{E_MP}の影響で、通信機器を含む電子装備は使えなくなり、上の指示を仰ぐこともできない。さらに人類が稀にしか観測できず正体を掴めなかったX个体——現代では「鬼級」や「姫級」と呼称される最上位个体まで現われたのだ。

統率を失った艦隊は烏合の衆でしかない。味方部隊は次々と塵殺^{ちりころ}され、怪物の群れに喰われていった。あれはもう戦いとは到底呼べないような死の泥沼であった。

それでも自分や妹艦、撤退中に合流した数名の艦娘が生き残れたのは、旗艦を務めた

古鷹と彼女を支えた加古の存在が大きい。あの二人がいなければ沈んでいた。今でも覚えている。二人は最期に「生きる」と言っていた。

(あの二人が今でも生きていたら……)

現実には「もしも」は意味をなさない。過去を変えることは誰にもできないからだ。理性ではわかっている。それでも考えてしまうのだ。二人を救っていたら、と。

ドアを叩く音がした。椅子ごと振り返ると、妹艦の衣笠がいた。

「青葉、一緒に飲まない？」

風呂を上がったばかりだろう。白いウール地のルームウェアを着た彼女は、亜麻色の髪を下ろしていた。そして、やけに高級そうなワインボトルを持っている。

「珍しいね。ガサがワインなんて」

「いいでしょう。たまたま取引先でもらったんだけど、一人じゃちょっとね」

衣笠は『海神』の営業を担っている『涉外課』の課長だ。『海神』を必要としそうな企業への売り込みはもちろん、単価交渉や契約の締結なども涉外課の仕事である。

パソコンの画面を閉じ、青葉は例のスマートフォンを手に立ち上がる。

「それじゃお酒のあては私が……」

「もう作ってあるって！ ほらほら！」

「ちょ、そんな引つ張らなくても逃げないってば！」

衣笠に腕を取られ、リビングへと移動した。

ソファーに腰を下ろすと、彼女がキッチンから大皿を運んで来る。グリーンリーフとチーズを生ハムで巻いた手軽なツマミ。衣笠が右隣に腰掛け、ボトルを開けた。

ワイングラスに注がれたのは、色鮮やかな赤だった。

「今週もお疲れ、青葉！」

「ガサもね」

グラスを軽くぶつけ合うと、小気味の良い音が響いた。

青葉は舌上でワインの風味を楽しんだ。なめらかな口当たりのライトボディ。香りや渋みといった主張は控えめで、さらっと飲めるような甘口のワインだ。

「久しぶりのワインもいいね〜」

「でしょ？ 家にいるときくらい仕事を忘れてリラックスしなきゃね」

酒に誘われた理由を今さらながら理解した。

「あはは……顔に出た？」

「もうばつちり。最近ずーっと難しそうな顔してるし……」

衣笠が心配そうな顔をする。

「抱えてる案件、そんな難しいの？」

「どうやら考え事があるまま顔に出ていたようだ。とはいえ、機密情報をそのまま話すわけにもいかない。ワインを一口。それから笑みを作り、おどけた口調で答える。」

「難しいなんてもんじゃないよ。正直、お手上げ」

「そうなの？」

青葉はひょいっとツマミを口に放り込む。

「全体像の見えないパズルをやってるみたいな感じかな。どこに何のピースをはめたら良いのかも、そもそも何の絵ができあがるのかもわからないパズルだよ」

「我ながら上手い例えだと思った。目的、動機、手段、犯人……二つの事件はあらゆるピースが抜け落ちたパズルに似ている。解き明かすには欠けたピースが必要だ。」

「うーん……よくわかんないけど、私にできることある？」

「じゃ、明日の夕飯はステーキで！」

「青葉！ そうやって茶化さないでよ！」

不満そうに頬を膨らませる衣笠。そんな彼女の頭を優しく撫でた。

「大丈夫だよ、ガサ。いつもよりちょっと手強いつただけだから」

「本当に？」

「信用ないなあ……」

衣笠が肩にもたれ掛かってきた。

「信用してるよ。でも、もし危なくなったら、すぐ逃げるって約束してね？」

普段は明るく振る舞っている衣笠も心に深い傷跡がある。

四年前、親友を失ったのは彼女も同じだ。古鷹と加古は二人にとってかけがえのない存在だったのだ。だが、衣笠は起きた現実を受け止めた上で前を向いていた。

一方、青葉は覆らない過去を悔やみながら生きている。彼女はそれを危惧していた。

「……大切な人を失いたくないんだ。二度とね」

「わかってる。ちゃんと用心するって」

衣笠の頭をあやすように撫でながら心中で呟いた。

(それは私も同じだよ、ガサ……)

あの日以来、衣笠の存在を支えに生きてきた。例えどんなことがあろうとも、妹艦を守ると誓った。それが二人に「生きる」ことを託された己の責任だと思っている。

衣笠はぐいっとグラスの中身を飲み干した。ボトルを手に笑う。

「ほら、青葉も！ 今日とはことん飲もう！」

「え……一応、明日も仕事あるんだけどなあ」

やれやれ、と苦笑混じりに頭を振ったときだった。

ベルのような通知音が鳴った。机上でスマートフォンが震動する。

青葉は手に取り、素早く画面をタップした。

「これは……」

メッセージアプリと思しき通知に位置座標が書かれている。すぐさまマップアプリを開いて座標を確認すると、サハリン島の南端にあるコルサコフ港からだった。

さらに通知が送られてくる。位置情報がわずかに変化していた。

（この速度と動き方……なるほど。発信源は船舶ですね）

「青葉？ どうかした？」

「ごめん、ガサ。急用で行かなきゃ」

意味を理解した衣笠が、むすつと膨れっ面になる。

「う、埋め合わせは後日するから！」

「……しようがないなあ。気をつけてね、青葉」

「行ってきます」

衣笠の額にキスをしてから、青葉は自室で身支度を整えて家を出る。駐車場に向かうエレベーターの中で、自分のスマートフォンからオフィスに電話を掛けた。

三コールで若葉が出る。

『若葉だ。どうした？』

「横須賀に即応班ミメチを集めてください。あとへりの手配をお願いします」

5

——午前三時。オホーツク海の上空は分厚い雲に覆われていた。

吹きつける冷たい風を裂き、真つ黒なゴムボートがうねりの高い水面に波筋を引く。

ゾディアックボートと呼ばれる複合艇RHIBだ。全長十一メートル、繊維強化プラスチックの

船底は荒波を押しつけ、三基のエンジンを全開にしながら高速で海原を突き進む。

青葉は、軍用双眼鏡を片手に周囲を警戒する。黒い野戦服ACUに予備弾倉や装備を詰めた

プレートキャリアスリッヅ。負い紐スリッヅで吊った自動小銃——M4A1を胸の前へ抱えていた。

複合艇の左右に艦娘がいる。高雄型三番艦の摩耶と、吹雪型一番艦の吹雪だ。

遊撃艦隊群の第二艦隊に所属する二人は、長門の命令で複合艇の護衛を担っている。

どちらも腕利きの傭兵艦娘で、摩耶は特に横須賀鎮守府出身のベテランだった。

摩耶が通信を送ってきた。

『おい、即応班！^{ミスチ} あと十分で目標^{ターゲット}と接触だ、準備しろ！』

危機管理対策室即応班——通称「ミスチ」は、対外調査課と警備課の選抜メンバーで構成された合同チームであり、『海神』の表沙汰にできない特殊作戦^{ブラックオプス}を担っている。

およそ五時間前、青葉は横須賀支部へ集めた即応班のメンバーと共に、遊撃艦隊群と合流するべく、若葉の手配した輸送ヘリで石狩湾の沖合一二〇キロに飛んだ。

民間軍事会社『海神』が保有する最大戦力——強襲揚陸潜水艦『海神』は母艦とする遊撃艦隊群は、大規模な補給や整備で帰港する以外は、一年の大半を海で過ごす。

『海神』と合流後、摩耶と吹雪の護衛を受けつつ、ゾディアックボートで宗谷海峡を越えた即応班は、発信される位置情報を頼りに南下する小型貨物船を追っていた。

青葉は双眼鏡を下ろし、その場で振り返った。

「全員、聞きましたね」

三人の部下が顔を上げる。初春、若葉、神風型一番艦の神風だ。

赤みがかった長髪と紅の着物に桜色の袴が印象的な神風は、対外調査課で秘密工作を担当している。彼女は左手に漆塗りの鞘へ収まった仕込み刀を握っていた。

「準備はできてるわ」

初春と若葉も頷きを返した。

アサルトライフルを負い紐で肩から吊った二人は、青葉と同様の黒い戦闘用ベストを制服の上に着けている。手慣れた様子でM4A1カービンに初弾を装填した。

「わらわも用意はできておる」

「……問題ない」

那智が複合艇の操縦席で親指を立てる。

彼女の隣に妹艦の足柄がいた。茶色い長髪を風になびかせる彼女は警備課の次長で、帝國海軍では横須賀鎮守府の所属だった。那智よりも気さくな反面、己を鍛えることが好きな根っからの武闘派だ。グラビアモデルじみた外見に騙されると痛い目を見る。

足柄が通信を介して答えた。

『当然っ！ いつでもいけるわ！』

全員、片耳にイヤホンを入れ、スロートマイクと呼ばれるチョーカーのような機器を喉元に付けている。声帯の振動を直接拾って送信するタイプの通信機だった。

青葉は双眼鏡をしまうと、M4のコッキングレバーを引く。

「作戦を再確認します。擬似艦装タクティカルガイド、オーブ起動——」

視界が一瞬明るくなり、照準指示枠や残弾数が表示された。

人間の肉体と九割が一致する艦娘は、軍事機器を内包した“人造人間”だ。

例えば、角膜表面の涙で構築された薄膜はナノディスプレイの機能を持ち、脊椎から腰椎にかけて擬似神経接続部があるおかげで、衣類越しでも艦装を接続できる。

加えて、戦術演算装置“フェアリーユニット”を脳に埋め込んでいた。戦闘管制AI“妖精”が艦装接続を確認すると、多角的に戦闘を補佐するシステムである。

しかし、青葉達は“擬似艦装”^{タクティカルガイド}という特殊機器を付けている。艦娘の機能を再現する擬似装置であり、全員がベルト状の起動コネクターを腰に巻いていた。

青葉が資料を視界に表示した。

「目標は新ソ連の小型貨物船“ロストーフ号”です。シグナルの発信源となっている積み荷パッケージの搜索と回収……もしくは保護です」

発信源の正体は今のところわからない。人間や艦娘あるいは何らかの荷物という線もあるだろう。ともあれ、極秘裏にそれを回収することが今回の作戦だった。

「夜偵の情報では、武装した警備が船外に複数確認されています。ですが、戦闘は極力避けてください。下手をすれば外交問題に発展しますからね」

現在、摩耶の装備した夜間偵察機——九八式水上偵察機が高度二五〇〇メートルから

対象を監視しており、戦術情報統合システムを通じて全員にその情報が共有される。

青葉は情報を確認しながら続けた。

「あと五分で日本の領海です。帝國海軍の艦娘が護衛に付くまで十五分。目標を十分に回収して、五分で現海域から速やかに離脱。大湊支部の迎えと合流します」

深海棲艦の出現以来、民間船舶の護衛は船籍を置いた国の海軍が行っている。

唯一の例外は領海内の航行だ。排他的経済水域はさておき、領海の航行中は当該国の海軍が船団護衛を担うと国際法で決まっていた。日本の領海では帝國海軍がその役目を負っており、『海神』は彼らの下請けとして、護衛業務を請負うことが多かった。

青葉が操縦席に顔を向けた。

「那智さんと摩耶さんは待機をお願いします」

『ああ。わかった』

『了解！ さっさと片づけろよ！』

だんだん船影が近づいてくる。ソ連の護衛部隊は後退を始めたようで、貨物船だけが静かに航行していた。那智が減速に入った。併航するようにボートを接近させる。

『よし、もういいぞ』

「了解です。ワイヤーアンカー、射出！」

青葉と他の四人が単発式のグレネードランチャーを構えた。

パシュツ！ 圧搾音を残し、フック状の鉤爪が船上に向かって射出される。

ワイヤーと繋がった鉤爪が、船縁やコンテナに引っかかる。各人がワイヤーを掴んで強度を確かめると、カラビナで腰に付けたハーネスとワイヤーを固定した。

青葉達はM4A1カービンを構え、船体側面を歩くように登った。

最新の情報では船外に人の姿は見当たらない。ゆっくりと慎重に船縁に足裏をかけて乗り越える。すぐさまカラビナを外し、足柄を先頭に隊列を組んで進んだ。

足柄が船内に通じる扉を開けて踏み込む。青葉、初春と神風、最後に後方を警戒する若葉が中に入った。電灯のぼんやりした明かりの下、白壁の殺風景な廊下を歩く。

足柄が指で壁を示した。船内の見取り図だ。ロシア語で非常口などが書かれており、青葉はそれを素早く記憶する。端末を確認すると、信号は貨物デッキから出ていた。

——運が良い。貨物デッキはちょうど一階層下の中央だ。

足柄が握り拳を作った左腕を立てる。止まれ、というハンドサインだ。

ロシア人の男が鼻歌を歌いながら、こちらに歩いて来る。警備員だろう。自動小銃をスリングで肩から下げていた。足柄は息を殺し、男が目の前に来た瞬間を狙って動く。手で口を塞いで引きずり込むと、ヘッドロックをかけて首を絞める。

「——っ!？」

足柄の腕に氣道を圧迫されて、男は急激な酸欠状態に陥った。

そして藻掻く暇もなく氣絶する。男は恐らく何が起きたか理解できなかっただろう。男を壁際に下ろすと、足柄は通路を確認して、足音を立てずに前進する。

警備課は荒事を専門とする部署だ。この程度は造作もなくこなす。

彼女はその中でも抜きん出た実力を持っており、こうした危険な仕事では欠かせない存在だった。しばらく進むと貨物デッキに着いた。足柄が再び腕を上げる。

警備の男二人が喋りながら階下を通った。ロシア語だが、艦娘は「妖精^{A1}」のおかげで翻訳なしに大抵の言語を理解できる。男達は給料のことを話していた。彼らはどうやら民間軍事会社の傭兵らしい。簡単な仕事、今月の支払は少ない。そんな内容だった。

昨今、軍事の民間委託は珍しい話ではない。軍に不満を持つ者や負傷して退いた者が起業し、軍の下請けを引き受ける。日本では少ないが海外ではよくある事例だった。

足早に階段を降り、開きっぱなしの扉の裏に隠れる。廊下を挟んだ向こうに短冊状のビニールカーテンがあった。目録を手積み荷をチェックする船員の男が一人——。

足柄がM4A1カービンを構える。彼女の肩を掴み、青葉は首を横に振った。銃口に消音器^{サプレッサー}は付いている。だが、殺しは最後の手段だ。やがて確認を終えたのか、

男は目録を壁に引っかけ、のんびりとした足取りで廊下の奥へと去った。

残り五分しかない。若葉と神風を見張りに残り、三人でビニールカーテンを潜る。

足柄と初春が室内を確認した。

「異常なし！」

「こっちも異常なしじゃ！」

青葉は携帯端末を手に信号を追う。

「ここで間違いないですね。手分けして探しましょう」

三人で怪しい積み荷がないかを探して回った。木箱やドラム缶、強化プラスチックのコンテナ……シグナルで大まかな位置は判るものの、肝心の積み荷は特定できない。

残り三分を切ったときだった。

「これは……」

何の変哲もないコンテナ。しかし、よく見ると扉のネジ穴から透明なチューブの端が出ている。二人にハンドサインを送る。足柄と初春がコンテナの左右に回り込んだ。

青葉は扉のロックを外し、慎重にコンテナを開けた。

コンテナの中に痩せこけた男がいた。白衣に薄汚れたセーターと四角縁の青い眼鏡を掛けた男は東洋人だった。三人の銃を見るなり、男は日本語でわめき立てた。

「撃たないで！ 撃たないでくれ！」

足柄が「立ちなさい！」と男の腕を掴んで立たせる。

「助けてくれ！ 殺さないでくれ！」

青葉は男の口を押さえ、落ち着いた口調で言った。

「静かに。騒げば命はありませんよ」

男が何度も頷く。手を離すと、男は怯えた表情で押し黙る。

「あなたは？」

「……新村、にいむらひであき新村秀明」

「民間人ですか？」

「ち、違う。帝國海軍の研究員だ」

「研究員？ ここにいた理由は？」

「逃げたんだ。そしたら『海神』の艦娘が助けてくれると……」

助けてくれる？ 青葉は足柄達と顔を見合わせた。

新村が必死の形相で詰め寄る。

「き、君たちは『海神』の艦娘だろう！？ 頼む、助けてくれ！ 殺される！」

「落ち着いてください。いったい誰に殺されるんですか？」

若葉が苛立った様子で口を挟んだ。

「早くしろ。時間がない」

残り二分を切っている。質問は山ほどあるが、今は脱出するほうが優先だ。

「撤収です」青葉は新村を横目に見る。「彼を保護します」

足柄が新村に肩を貸した。

「ほら、しっかり立ちなさい！ 行くわよ！」

元来た通路を足早に引き返す。若葉と神風が先行した。甲板の安全が確保できると、足柄が新村を連れ出した。幸いにもまだ気づかれていない。侵入時に使ったワイヤーを腰に巻きつけ、新村を背負うと、足柄は懸垂降下で待機しているボートに降りた。

若葉と神風が降下を始めたときだ。気配を感じて振り返った青葉の目に、上部甲板で自動小銃を構える男が映る。叫ぶよりも先に、相手の銃口が発砲炎を噴いていた。

フルオートフルオートの銃声が静けさを破る。乾いた着弾音が立て続けに響く。

「ぐっ!?!」

流れ弾を食らった初春が転倒した。右の太腿に被弾したようで、足を押さえながらも船縁に向かおうとする。青葉は援護するべく、彼女の前に立ってM4を速射した。

「一名、負傷！ 援護カバします！」

消音器で減音された控えめな銃声。鉄の手すりを擦った弾丸が、跳弾して淡い火花を散らした。男の胸と腹に銃弾が突き刺さる。男が虚空を撃ちながら仰向けに崩れた。

これで終わりではない。重たい足音を立て、警備の男達が甲板に上がって来た。

セレクトターをフルオートに。扉の周辺を撃ち、男達が向かって来るのを食い止める。

二〇発を五秒で使い切り、遮蔽物を探した。シートを掛けたドラム缶と木箱がある。

ドラム缶の裏に身を隠し、青葉は弾倉を交換しながら怒鳴った。

「初春さん！ 立てますか！」

「……心配ない！ わらわは大丈夫じゃ！」

薙ぎ撃ちで飛び出した男二人を射殺すると、初春は足を引きずってワイヤーを掴む。無事な左足で船縁を蹴り、待機しているボートに素早く降下していった。

上部甲板に三人、船内から七人が現われた。男達は皆、揃えたようなカラシニコフ^{A K 4 7}で容赦なく撃ってくる。槓桿^{こうかん}を引いて再装填^{リロード}。青葉は、指切りの三点射撃で応戦した。

しかし顔を少し出しただけで、倍以上の弾丸が飛んでくる。ビニールシートは一瞬でズタズタとなり、跳弾で火花が散った。この様子だと長くは持ちそうにない。

空の弾倉を再び交換する。那智が焦れたように急かした。

『早くしろ！ 時間が無い！』



「わかつてます！ 船から離れてください！」

『離れるだど!? いったい何をするつもりだ!』

「こうするんですよ！」

M4A1カービンを連射で撃った。意表を突かれた甲板上の男三人が被弾して倒れる。三〇発をばらまいて、青葉はドラム缶の裏から駆け出し、船縁を蹴って飛び込んだ。

わずかな浮遊感を経て、海水のクッションに叩きつけられる。水を吸った衣服が鉛のごとく重くなり、手足は水温の冷たさで痺れるも文句を言っている余裕はない。

ボートを目指して必死に泳いだ。追いつめる銃弾が船上から海面を耕す。

『即応班、あたしらが援護してやる！ 吹雪!』

『は、はい！ 了解です!』

摩耶と吹雪が対空機銃を発砲した。二五ミリ三連装機銃の掃射が弾雨となり、甲板のあらゆるものを抉る。深海棲艦の艦載機を撃墜する武装である。普通の人間が食らえばひとたまりもない。男達の体が一瞬で血煙となり、肉片をそこら中にぶちまけた。

那智が複合艇を回り込ませ、足柄は辿り着いた青葉に手を貸した。

「掴まって！ 引き上げるわよ！」

若葉と二人で両腕を引っ張り、青葉を回収する。

「いいぞ！ 出せ！」

複合艇をUターンさせ、那智は全速力で離脱にかかった。摩耶と吹雪も追隨する。

二人の援護射撃が効いたのだろう。貨物船からの銃撃は止んでいた。

那智が呆れ顔で苦笑する。

「まったく無茶をする」

「……自分でもそう思いますよ」

青葉は両肩を喘がせながら上体を起こした。

「初春さんの怪我は？」

神風が手当てをしながら答えた。

「大丈夫よ。弾は抜けてるわ」

応急キットから包帯を出し、止血剤入りのガーゼを当てた上から丁寧に巻いていく。

圧迫包帯と伸縮包帯で二重巻きをしてから、付け根を縛っていた止血^C帯^Aを外した。

初春が素直に謝った。

「すまぬ。不覚を取った……」

「いいんですよ。無事ならそれで」

艦娘は頑丈にできているが不死ではない。当たり所が悪ければ、たった一発の銃弾で

死ぬこともある。初春の銃創は幸いにも太い血管を逸れていた。動脈が傷ついていたら大量出血を引き起こしていただろう。彼女はその意味で運が良かったのだ。

青葉はまだ怯えている新村に目を向けた。

「さて、新村さん」

ビクツと両肩を震わせた新村の前に座る。

「さっきの続きです。知っていることを全て話してください」

6

北海道の陸地が見えてきたのは二時間後だった。

日本の最北端である宗谷岬から、西に一キロほど離れた場所に小さな波止場がある。テトラポットを積んだ無人の埠頭に、数隻の釣り船が係留されていた。

二台のSUVが空き地に止まっている。こちらに気づいたのか、ライトを点滅させて合図を送ってきた。間違いない。大湊支部が寄越した警備課の迎えた。

那智がゾディアックボートを岸壁に横付けする。

「青葉！ 私はこいつを『海神』に戻してくる！」

「わかりました。こちらは予定通りセーフハウスに向かいます」
全員が降りると、那智は摩耶達と再び沖に出て行った。

SUVから三人の艦娘が降りる。

背丈や艦種はバラバラだが、三人ともダークスーツを着ていた。黒髪を一束ねにした軽巡艦娘が進み出てきた。黒い革手袋を付けた手を青葉に差し出す。

「大湊支部警備課の矢矧よ。本社から話は聞いてるわ」

整った目鼻立ちに精悍な雰囲気をもとう彼女は、阿賀野型の三番艦だ。

青葉はその手を握り返して尋ねた。

「対外調査課の青葉です。護送の準備は？」

「できてるわよ。支部でヘリが待機してるわ」

「ありがとうございます。助かりますよ」

青葉はM4自動小銃や戦闘用ベストプレートキャリアを外した。他のメンバーもそれに倣う。

『海神』は特例で武装の所持を許可されている。とはいえ、あくまでも業務に必要な範囲での話だ。そもそも作戦が極秘である以上、目立つような格好は避けたい。

右腰のホルスターを残し、SUVの荷室に装備を放り込む。矢矧の手渡したタオルで濡れた髪を拭きながら、青葉はきよろきよろと周囲を窺う新村に声をかける。

「あなたを今から隠れ家に移します。そこで全てを話してもらいますよ」

「……わ、わかった」

新村は臆病だが馬鹿ではなかった。知っている情報を余さず話す見返りとして、身の安全と命の保証を求めてきた。それらが約束されない限りは何も話さない、と。

短い押し問答の末、青葉は新村の要求を呑むことに決めた。

新村の握っている情報の中身はまだわからない。だが、『海神』に助けられる前提で貨物船に乗せられた以上、何か重要な手がかりを持っていることは確かだろう。

気がかりなのは、新村を狙っている者の存在だ。

「先に一つ教えてください。なぜ、あなたは命を狙われているんですか？」

当人の怯え方を見るに嘘をついているとは考えにくい。これからリスクを背負うのは『海神』なのだ。本当に新村が命を狙われているなら、敵を知っておく必要がある。

新村は少し逡巡してから答えた。

「私は深入りし過ぎたんだ」

「とうとう？」

「私も始めは知らなかった。艦娘の『改三』に関する研究だと……そう聞いてたんだ。でも、後から違うとわかった。実際はもっと危険なプロジェクトだ……」

「プロジェクトの内容は？」

「……話せない。身の安全が保証されてからだ」

そう言つて、新村が疲れ切った顔で口を閉ざした。

青葉は短い時間で得た情報を整理する。新村は帝國海軍の研究員。それも艦娘絡みの研究に携わつていた。ところが、実際は何らかの危険な研究をさせられていた。

突然、足柄が拳銃を抜いて怒鳴る。

「伏せなさいッ！」

銃声が轟いた。何が起きたのかを知るよりも早く、血飛沫があがり、新村が倒れる。青葉は慌ててSUVの裏に隠れる。拳銃を抜き、車両の陰から前方を窺った。

目の前の国道に二台の黒いバンがいた。後部のドアを全開にして、目出し帽を被った男達が自動小銃を撃ちまくる。窓ガラスが粉々に砕け、車体にも無数の穴が開く。

タイヤがパンクして車体が傾いた。軍用弾を防げるほど市販車の耐久性は高くない。しかし、開けた波止場で今すぐに使える遮蔽物は二台のSUVだけだ。

足柄や初春が撃ち返すも、倍近い銃弾が返ってくるせいで下手に顔を出せない。

青葉は這うように新村へ近づき、襟首を掴んで車体の裏に引き摺り入れた。

「新村さん！ しっかりしてください！」

背中から撃たれた新村は、腹と左胸に傷を負っていた。口から血を溢れさせながら、必死に何かを伝えようとしている。耳を近づけると、新村は擦れ声で言った。

「……カリユ……ブデイス……」

四肢を痙攣させ、新村は動かなくなる。虚ろな瞳が暗い空を見つめていた。矢矧が舌打ちする。助手席の窓から撃ち返した。

「よくもやってくれたわねッ！」

二連速射ダブルタップで男の一人を撃ち殺す。彼女の部下や足柄達も援護射撃を加える。

こちらの反撃が本格化すると、二台のバンは急発進して逃走した。

初春が「新村は！」と訊ねてきたので、青葉は首を横に振った。若葉や神風、足柄が苦々しい表情で押し黙る。初春は落胆にも似た表情で溜息を漏らした。

「全てが水の泡じゃ。振り出しに戻ってしまったのう……」

「いえ。そうでもありませんよ」

新村の目蓋をそつと下ろし、青葉は険しい顔つきで立ち上がる。

「……カリユブデイス。新村さんは最期にそう言っていました」

襲撃者の正体は不明だが、間違いないその狙いは新村だった。だから彼を殺した後はあっさりと引きあげた。となると、新村の話は全て事実だったということになる。

こうなると判っていけば、多少強引にでも情報を聞き出しておくべきだった。苛立ちを鎮めるように深く息を吸う。怒りは判断を鈍らせる。今は冷静さが必要だ。青葉は矢矧に指示を出した。

「大湊支部に連絡を入れてください。このまま本社に向かいます」